

# ミュージアムは 「聲の森」

西 洋子

(にしひろこ)  
東洋英和女学院大学教授



「ダンスで出会う・ダンスでつながる」ワークショップ参加者

昨年11月、民博で開催された

公開ワークショップ「ダンスで出会う・ダンスでつながる」。モノたちの声が響き合う展示会場で得たイメージを創作ダンスで表現した。

障害のある人やない人、女性や男性、子どもや大人、ずっと踊ってきた人や初めてダンスをする人……。

さまざまな個性をもつ人びとが集まり、ともに創り、ともに踊った2日間。

未来のユニヴァーサル社会の  
ヒントを秘めた活動を紹介する。

未来へひらく  
ミュージアム

## 楽しい予感

ミュージアムでかけるとき、あなたは何を期待しますか。怖いくらいに静かで、ちょうど薄暗い館内には、ライトに照らし出され行儀よく並んだモノたちが待っています。こうしたモノとの出会いは、ときにも鮮烈です。目に見える形の不思議さや色の鮮やしさ。そこから過去の知識や経験が喚起され、ミュージアムで新たに得た情報も加わって、私たちは遠い世界の人びとの営みやその歴史、見たこともない想像さえできなかつた風景に思いを馳せます。

モノを通して自分や世界と向き合うという、知的で静かな作業をおこなうミュージアムという空間と、感性をフルに發揮し、ダイナミックにからだで創造し表現するダンスが出会ったら、そこには何が生まれるのでしょうか。しかも、その場に集う人びとが、とても個性的だったり。つまりは、ワイワイ、がやがや、バラバラ、ごたごたの状況のなかからどんなできことが浮かび上がってくるのか。いえいえ、こうした出会いと状況だからこそ、おもしろいコトが起こりそうな楽しい予感がするのです。

## ワークショップに響く声

公開ワークショップ「ダンスで出会う・ダンスでつながる」は、ミュージアムにとってもちろん、ダンスにとっても、とても刺激的で実験的な試みでした。

一風かわった今回のワークショップ。館

内いろいろなモノからは、さまざまな声が聞こえてくるかのようです。

まさに、「ミュージアムは『聲の森』」です。まずは、参加者を迎える入り口あたりの声に、耳を傾けてみることにします。

モノの声 いろんな足がやつてきた

今日のお客は本当にいきやかだ。もうすでにふたつのグループが通りすぎていった。今度のグループは、まだ遠くのようだから声は聞こえないけれど、響いてくる足音の、何とまあ雑多なこと。

全部で二〇人くらいかな。大きい足、小さい足、ハイヒールもスニーカーも革靴もいる。おっと、車いすの車輪が頭の上を一瞬で走り去った。その後ろからはゆっくりとベビーカー。どちらも、似たような感触だ。

いろんな足の間から見上げれば、おじさんは肩をまわし、女の子は腕をぐんやぐんやさせて踊っている。肘と手でつながる女性たちは、ゆったりと談笑しながら優雅に過ぎていく。

何だかいもど様子が違う。ミュージアムの入り口では、誰もがちょっと緊張するはずなのに。随分とリラックスしたからだや空気。そう、お風呂あがりのような、直前まで、みんなで遊んでいたような。いたいこの人たちって、なんだ

「音」「形」「色」の三つのグループにわかれ、まずは、人やモノに出会うためのウォームアップをおこないました。自己紹介をしたり、よび名を名札に書いたり、言葉の世界で他者と出会うと同時に、ちょっとした動きを通して、からだの世界での出会いも試してみたのです。

初めて出会ったパートナーの背骨あたりを上から下へ、下から上へ、思いついのリズムでとんとん叩くと、相手は「あ、ああ、あ」や「ほ、ほほ、ほほ」と音声で返してくれます。向かい合って手をとり、相手の腕を好きなように動かしてみると「タコみたいやな」とか「肩こりが楽になるよ」とか、いろんな声が聞こえきます。最初は少しはずかしかった、でも笑顔、時々大爆笑。からだと心が温まり、つながりが柔らかになら、さあ、モノたちに会いにでかけます。

このワークショップの参加者は、さまざまながらだのもち主です。子どもやじめて、二日目にはミュージアムのエントランスホールで発表するといつことです。それは、展示場をまわった後には、グループの仲間とからだでの表現活動を行います。でも笑顔、時々大爆笑。からだも短い時間です。ですから参加者は、発表までの活動時間は約四時間。とても楽しいけれど、ちょうど大変でもあります。もっとゆっくり、じっくり見たい、さ

出会いのためのウォームアップ



カナダ・イスレットの石製彫刻(標本番号H212671)



展示を見ながらあらわす。からだが思い出す

ワークショップの参加者、約五〇名は、



色の世界を知り、色をからだであらわす



アフリカのマシンデ族の木彫像(標本番号H7113)



人間ピラミッド「てっぺんがぼく」

わりたい、つくりたい。ホントそうですね。次回は必ずそうしよう。

さて、いよいよ「形」グループが展示場に入していくようです。ミュージアムのモノたちからは、どんな声が響いてくるのでしょうか。

テーマにもどづく展示の鑑賞

モチ声 からだで見る

こちらをじっと見ていたかと思うと、ぱくと同じ顔をつくったんだ。目も口も斜めになつていてるぱくの顔。ゆがんだところを見透かすようでしょ。そうかと思うと、次は隣の奴の真似をしている。「口をタ」みたいにすばめて、ひょうきんな表情だなあ。「ほつ、ほつ、ほつ」と妙な声までだしあげた。その声に合わせて、おなかを揺らしている。何だ、

顔は、こっちに向けてね。みんな、どこかがつながっている感じだよ」「旦先生、ぱくの頭をさわってね。そう」「ふむふむ、こんな感じだったね。これはやっぱり家族のことかな」「そしたら最後は……」「人間ピラミッドが、サバナの木にかわっていくのはどう」「木が揺れて、そこから人ひとが、自分の好きな方に向かって歩き出す、ゆづくりと」「あら、すく素敵な表現」

トランスポール。長い階段には、たくさんのお客様が集まつて、とてもにぎやかなバフォーマンスになりました。ミュージアムを取り巻く木々や、すぐそばの水辺の景色に、今ではすっかりうちだけた参加者の生き生きとした表情と動きが、くつきりと浮かび上りました。どんなダンスに仕上がったのかつ。それはもういろいろで、楽しすぎて。

パフォーマンスを観てくださったお客様には、ワークショップの参加者とミュージアムのモノたちが「ダンスで出会い、ダンスでつながる」プロセスが伝わるでしょう。それとも、まったく新しい、独自の表現として受け取られたのでしょ。か。見る人の心の動きまでは、わかりません。それでも、さまざまな声を響かせるモノたちと、そこから生まれたです。そして二日目には、ワークショップで茅生させました。それを創造の源として、さらに仲間と声を交わしながら、自分たちの表現へと練り上げていったのです。そこで「声の森」と題して、三グループが共同でひつの作品を発表しました。パフォーマンスの場所は、ミュージアムのエン

## 表紙モノ語り ヒヨウタンから「おぎやあ!」

(標本番号H210155、高さ22cm 幅14cm 奥行14cm)

● 関 雄二  
研究戦略センター



南米アンデス地帯は、原産地だけあって、文様を施したヒヨウタンは、じつに四五〇〇年も前から知られている。その後、ヒヨウタンは漁網にかける浮きとしでも利用されたが、一九世紀になつてから、この作品のように民衆芸術作品の素材として注目され、また観光土産として流通するようになる。乾燥させたヒヨウタンの表面を磨き、下絵に彫刻刀で刻みを入れ、地の明褐色

トーンの白い部分、そして燃えさしをえて、焦がしてできる黒色部分などを対比させ、祭りや日常生活などさまざまな場面を表現する。技術こそ単純だが、描く図案は緻密である。

表紙写真では、ペンドに横たわる農民女性の出産前の場面が描かれている。しかし周囲にはアンデスの儀礼的要素もあり、それがいる夫らしき人物の傍らに立

つ、黒めがねをかけた怪しげな男性を見てみよう。手につかむ動物は、やや大きめながら、世界で唯一一家畜化された食用モットであるクイ(テンジンクネズミ)のようだ。クイは、料理のほか、呪術でもよく用いられ、解剖して、病気の原因などを突き止めることが知られている。つまりこの男性は呪医ということになろう。

ベッドの際に座る女性も折り足下に広げた布には、乾燥させたコカ(コカノキ科の植物)の葉が見える。コカの葉はアンデスの儀礼には欠かせず、口に含んで、他の用具とともに布の上に広げられ、儀礼に供せられることが多い。いずれも安産を祈願しての行為であろう。

ここに掲げた写真は、裏面の出産後の場面。いずれも上部には、トウモロコシの醸造酒であるチヤを保存するための壺が見える。チヤ酒も、アンデスの祭りや儀礼に不可欠な存在である。

わからぬで動きました」「あーあのワーカーさんです」「へー!!」

どうしてここで感心するの。もしかしてこの子、わからないということがおもしろいのかな、オモロイナ。

あれ、誰かが私をゆっくりさわって、あたかくなってきた。あら、ほつ尾なの。親子熊の下にいる私に気づいて、おなかを揺らしている。何だ、



アフリカのビーズの首飾りのいろいろな色のイメージを形であらわす

よつ。  
「……とされていますが、本当はよくわからないんです」「へー!!」

どうしてここで感心するの。もしかしてこの子、わからないということがおもしろいのかな、オモロイナ。

あれ、誰かが私をゆっくりさわって、あたかくなってきた。あら、ほつ尾なの。親子熊の下にいる私に気づいて、おなかを揺らしている。何だ、

さつまのオモロイ子が「おばさんの」先祖様はシャケなの、ぼくは上の熊がない。爪がスゲーから」と指を爪の形にひらいている。一階の熊親子も、爪形の手でさわってもらえないのに。でも、いつだって私の上にいるから無理よね。突然立つている私たちだけね。何といつても、ご先祖様だからねえ。

モノたちのこんな声に出会いながら、各グループは、展示鑑賞を終えました。そして今度は、動きながら、自分が発する声を、仲間と交わしています。

勝つのは決まって私たちだけね。何と寝そべれば、自分の祖先を心に描く人びと、大きさ比べができる楽しいかな。乡の匂いを伝えられるといけれど(防虫剤の匂いだわ、なんていわれたらどうしましよう)。

「……とされていますが、本当はよくわからないんです」「へー!!」

今度は本映像の人間ピラミッド」「横に長くなつて、次は縦にのびていこうか。一君の車いすの上に日ちゃんが乗つたって私の上にいるから無理よね。尾の尻尾ね」。そうそう、私は尻尾なの。親子熊の下にいる私に気づいて、あたかくなってきた。あら、ほつ尾なの。親子熊の下にいる私に気づいて、おなかを揺らしている。何だ、

「アフリカの成人式のスカートのように

イメージをからだで表現する

モチ声 さわって知る

「このトーテムポールは、親子の熊と鮭……」ふー、今日も、おきまりの説明がはじまつたわ。どうせみんなで上を見上げて「大きい」と言うだけだし



アメリカ展示場の仮面にインスピレーションを得て、仮面の思いをからだに取り込む

ふくらんで動きましょう」「あーあのワーハイツね、がさーそつて」

今度は本映像の人間ピラミッド」「横に長くなつて、次は縦にのびていこうか。一君の車いすの上に日ちゃんが乗つたって私の上にいるから無理よね。尾の尻尾ね」。そうそう、私は尻尾なの。親子熊の下にいる私に気づいて、おなかを揺らしている。何だ、

うか。一君の車いすの上に日ちゃんが乗つたって私の上にいるから無理よね。尾の尻尾ね」。そうそう、私は尻尾なの。親子熊の下にいる私に気づいて、おなかを揺らしている。何だ、